

イネの栽培活動を起点とした幼稚園における環境教育の実践

Practice of environmental education in kindergartens starting
from rice cultivation activities

平 尾 健 二

Kenji HIRAO

技術教育ユニット

(令和2年9月30日受付, 令和2年12月10日受理)

要 約

幼稚園における環境教育・食育を推進するために、イネの栽培をベースとした実践を提案し、研究室と園の共同による教育活動として定着して16年が経過した。本報では、その活動をふり振り返りながら、アンケート調査によって幼稚園ならびに研究室における評価を試み、双方における活動の有効性を明らかにした。その結果、両者をともに満足させる結果が示され、さらなる活動の継続・発展が今後も重要であることが明らかになった。

キーワード：幼稚園, 幼児教育, 環境教育, 食育, 作物の栽培, イネ

1. はじめに

現行の幼稚園教育要領¹⁾において、領域「環境」のねらい及び内容は、「周囲の様々な環境に好奇心や探求心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。」とされ、園の内外を通じて子どもの多様な体験活動の充実を図ることが求められている。さらに、幼稚園における体験活動は、特定の領域等や学級での取り組みにとどまらず、教育課程全体に適切に位置づけ、総合的に推進することによって、大きな成果が期待できるといわれている²⁾。また一方、環境教育の実践においては、子どもの発達段階に応じた内容を選定することが大切であると考えられる³⁾。年齢の高い子どもを対象とした場合には、「環境」を理論的に教え、それを基に社会における様々な事象に結びつけながら、自分の内と外で客観的に理解させることも可能である。しかし、幼児のような年齢が低い子どもの場合には、体験的な活動の中で身の回りの「環境」を徐々に認識させる（気づかせる）ことが重要である⁴⁾。一方、生き物を育てる活動は、自分の周囲の環境の中で成長する生き物の姿に喜びを感じ、日々の観察の中で新たな変化を発見する行為である⁵⁾。特に作物の栽培は、幼児教育の中で多く行われている活動であり、発達段階の最も早い時期に適した環境教育の一内容として重要である。さらに、食物を育て、それを味わうことは食育としても大きな意味をもっている。

著者は、主に中学校の技術科教育における「栽培（生物育成）」の専門領域、小学校における栽培学習（生活科・理科・総合的な学習の時間）の教育研究に携わる立場である傍ら、福岡市内の一幼稚園での環境教育・食育活動を社会貢献活動として位置づけ、研究室のゼミ活動の一つとして、所属学生とともにやってきた。園庭におけるイネの栽培～コメの加工（脱穀～精米）の支援、ならびにそれに関連した「環境教育・食育のための劇」を上演する活動である⁶⁾。本活動は、研究室のゼミ活動の一つとして2004年から継続的に行っており、今年度で17年目を迎えたところである。当研究室の学生は、中等教育教員養成課程技術専

攻や、初等教育教員養成課程、もしくは大学院教育学研究科技術教育（コース、領域）に所属し、幼児教育についてはこの活動で初めて携わる者たちばかりである。

本論文では、過去 16 年間に及ぶその活動について振り返り、幼児教育におけるイネの栽培活動を起点とした環境教育・食育の意義を考察した。さらに、活動先の幼稚園教員、ならびに本活動に携わった学生たち（卒業生）への追跡調査を行い、この活動が園の教育にとってどのように貢献したのか、また、活動経験が学生たちの卒業後の生活や教員人生にどのような影響を与えたかについて明らかにすることを試みた。

2. 園での栽培・食育活動

活動の舞台は、福岡市内の私立 K 幼稚園であり、第 1 回は 2004 年に遡る。園庭に設けられた大型バットの疑似水田を用いたイネ作り活動をベースに教員の指導の下、園児（年長組）が栽培活動を行ってきた。本園では、通常から食育に重点が置かれ、野菜を中心とした栽培活動や調理活動が伝統的に行われてきた。2004 年に著者の方から主食（コメ）の栽培を提案したところ、教諭の賛同も得られ、カリキュラムへの導入もスムーズに行うことも出来た。本園は、2010 年度から場所と経営母体を移して新設されたが、教育方針や諸活動の内容は受け継がれ、現在に至っている。現在も新興住宅街の中にあり、周辺に田畑は一切存在せず、さらにマンション住

まいの家庭も多いため、園児が作物の育っている様子を目にすることは少ない。その中で、園の菜園で年間を通して作物を栽培し、季節の行事と合わせて、調理し食べる活動が通常のカリキュラムの中で行われていることは、幼児期において栽培や食べ物に対する関心を高める上で、貴重な体験となっている。このことにより、イネ作りの実践と相まって、本園の環境教育としての内容は充実していると判断される。実施当初の教諭との打ち合わせでは、イネを単に植えて、収穫して、食べるというプロセスを教えることに終始するのではなく、環境教育の一環として、育つお米が太陽のエネルギーを受けて出来たものであること、人間が生活していくために必要な「元気の素（幼児に対するエネルギーの代名詞）」であることに気づかせたいことを強調し、理解を得た。この方針はそれ以降変わっていない。

園の現在の食育活動の年間計画を表 1 に示す。野菜の栽培・調理活動を中心とした中で、イネ（もち米）の栽培活動もしっかりと位置づけら

表 1 栽培・調理等食育活動年間計画（令和 2 年度）

食育のねらい ・食事を通して、自らも含めたすべての命を大切に作る心の形成 ・食事を通して、食材や調理への関心を高める ・日本や地域で培われた食文化の体験 食育の内容 ・食物への関心を育て、望ましい食習慣を身につける ・栽培活動や調理体験を通して、食物への関心や大切に作る心を育てる ・年齢に応じて、食物と健康についての関連性を知る			
月	栽培活動	収穫	調理活動等
4	・夏野菜の種まきと苗植え <small>きゅうり・トマト・なす・ピーマン・スイカ・枝豆・いんげん</small> ・ミニトマトの観察（年長児） ・夏野菜の水やり、世話、観察	・玉ねぎ	・よもぎ団子（年中児）
5	・ミニトマトの定植（年長児個人の鉢） ・さつまいも苗植え	・そら豆 ・スナップえんどう	・よもぎ団子（年少児）
6	・もち米種籾水つけ、種籾蒔き（年長児） ・もち米田植え（大型コンテナ）	・枝豆、インゲン ・じゃがいも ・きゅうり、トマト、なす、スイカ ・ピーマン	
7			
8			・お泊り会カレー作り（年長児）
9	・じゃがいも植え付け ・冬野菜種まきと苗植え <small>大根・人参・ブロッコリー</small> ・冬野菜の水やり、世話、観察		・月見団子作り（全園児）
10	・冬野菜種まき <small>かぶ・葉物</small> ・もち米稲刈り（年長児） ・スナップえんどう、そらまめ蒔き	・さつまいも	・スイートポテト作り（年少児）
11	・玉ねぎ苗植え ・もち米 脱穀精米体験（年長児） 見学（全園児）		
12		・大根	・餅つき（全園児） <small>もち米研ぎ、餅つき、餅丸め</small>
1		・じゃがいも、人参、ブロッコリー ・葉物	・揚げ餅（鏡開き）（全園児） ・料理ごっこ（全園児） <small>皮むき、食材切り、可食部位を知る</small>
2	・豆の観察と水栽培、土に植え替え（全園児） <small>小豆、金時豆、うずら豆、白花豆、紫花豆、黒豆、大豆</small>		・豆まき（全園児） 大豆を食べる ・煮豆（全園児） 展示の豆
3	・じゃがいも植え付け（年中児） ・ミニトマト蒔き（年中児）		

れ、当研究室の活動との協同が定着していることが確認できる。イネに関しては、6月の種まきに始まり、12月のもちつき大会までの約半年間にわたる活動となっている。大学（著者）と園との連絡は綿密に取られ、定期的に生育チェックを行い、適宜、助言を行っている。

イネ作りの中心は年長組の2クラス（約50名）である。擬似水田には、80Lの大型バット（通称、カク舟）を3つ使用し、1つのバット当たり20株（1株、2本植え）とし、全体で60株程度としている。供試品種は、もち米品種（ヒヨクモチやハクトモチ）としている。これは、収穫したコメを園の恒例行事のもちつき大会でのもちの一部とすることで、コメに対する認識を深めるためである。必ず、園で播種し育苗した苗を園児が1株ずつ手植えすることにより田植えを行っている。田植え後は、バットを日当たりの良い園庭の一角に設置し、担当教員が適宜肥培管理を行っている。本園では、導入当初イネ特有の外敵（スズメや害虫）、病気が発生する危険性は不明であったが、少々の害虫（カメムシ、イナゴ類）による食害は発生したが、収量に大きく影響するほどの被害は出ていない。ただし、スズメによる食害はかなり見られ、防鳥網の設置が欠かせない状況となっている。このようにして、育苗から、移植後の分けつ発生、出穂、登熟までの一連の田んぼの風景を園庭に再現することができている。常に園に田んぼがあり、毎日、全園児、教職員、保護者の目に留まることにより、イネがより身近なものとして園に定着することになったことは、野菜の栽培に加えて、より食育の範囲が広がったものと想像できる。

3. 大学（ゼミ）による食育実践活動「太陽戦隊おこめレンジャー」

研究室において、幼稚園における食育実践活動「おこめレンジャー」の上演を全員で取り組むゼミ活動の一つに位置づけている。例年11月初旬から約3週間をかけて、本番（園での上演）に向けて以下の準備を行っている。

1. テーマ決め（全員）
2. ストーリー・配役決め（全員）
3. シナリオ作り（4年生中心）
4. シナリオ読み合わせ（全員）
5. 衣装・小道具作り（各自）
6. 立ち稽古（全員）
7. 通し稽古（全員）
8. 本番（全員）11月下旬

毎年、研究室メンバー全員（著者と3年生、4年生、大学院生）がアイデアを持ち寄り、その年の劇のメインテーマを決定する。テーマは食や健康に関するものを中心とし、「園児にとって理解しやすいもの」が前提となる。その一方で、「おこめレンジャー」の名の通り、レンジャーたちの力の源が太陽エネルギーであり、その結晶がお米（ごはん）であること、その力をつかって敵を倒すことを常に背景とすることになっている。これは、生活に身近な環境として、園庭でのイネ（作物）の栽培活動を認識させることをねらいとしているためである。

3年生にとっては、配属後の初めてのゼミ活動が“演劇”であることに戸惑いを隠せないが、すでに伝統化しており、配属希望の面談を行う際に、著者からこの活動を知らされ、興味をもって取り組む場合が大半である。テーマ決めの後は、配役とストーリーを全員で考える時間をとる。前もって構想した案を持ち寄り、それをうまく合わせていくが、ここではKJ法を使いアイデアをつなぎ合わせる活動となる。各自の思考の流れを統合しつつ、バランス良く配役を決める作業は研究室のメンバーにとって大きな協働作業となる（写真1）。配役やポイントとなる言い回しは、その年に巷で流行している言葉、ギャグ、キャラクターを積極的に盛り込むことにしており、全員が一体となり真剣な議論の中でストーリーが出来上がっていくプロセスは、笑いが絶えない充実したゼミ活動となっている。著者には毎年、事件に巻き込まれ、レンジャーに助けを求める「お米博士」役が与えられている。

その後、経験のある4年生が中心となり、シナリオ制作を行う。起承転結を意識した園児にとってわかりやすいストーリー展開が求められる場面であり、時には大学院生に相談しながら、過去の経験を総動員した活動となる。シナリオ完成後の読み合わせでは、園児に伝わる日本語表現の重要性を誰もが認識することとなる。いかに3～5歳の子どもにストーリーを理解してもらうか。修正を経ながら「伝えられる側の立場」に立った表現の大切さを全員で痛感することとなる（写真2）。

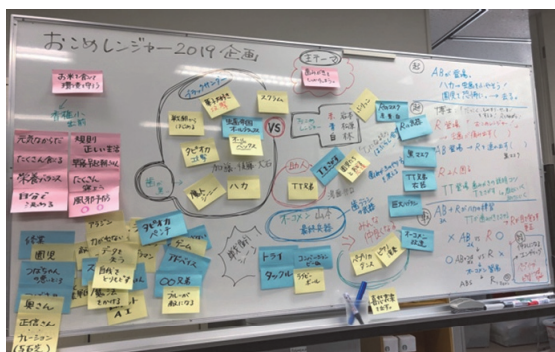


写真1 KJ法を使った劇のストーリー作り



写真2 シナリオ読み合わせの様子

並行して、ものづくりの活動が始まる。主役のレンジャーのマスクから、武器、悪役や助っ人の衣装に至るまですべてを手作りで準備する。技術教育の基本である工作・ものづくりの力の見せ所である。工作が得意なメンバーが主導しながら進めることになるが、個性に富んだモノが出来上がることもしばしばである。

シナリオを片手に立ち稽古を重ね、時間を計りながらの通し稽古に全員で挑む。全員で集まれる時間を調整しながら、本番までの時間を逆算しながら集中した取り組みとなる。感情を込めたセリフまわしや殺陣といった、普段経験しないことへの挑戦は、各メンバーの様々な経験値を上げることとなる（写真3）。

上演本番は、もちつき大会前の11月下旬から12月上旬に行われる（写真4、5）。過去16年間に上演したテーマを表2に示した。2004年の第1回目においては、レンジャーが登場し、お米からご飯になるまでを解説するシンプルな内容であったが、その後、子どもの食や健康を妨害する悪役にレンジャーたちが立ち向かう展開となった（2005年～）。取り扱うテーマについては、全16回中、「インフルエンザ」が4回、「好き嫌い」が4回と最も多く、次いで歯磨き（3回）、お菓子やジャンクフードの食べ過ぎ（2回）となってい

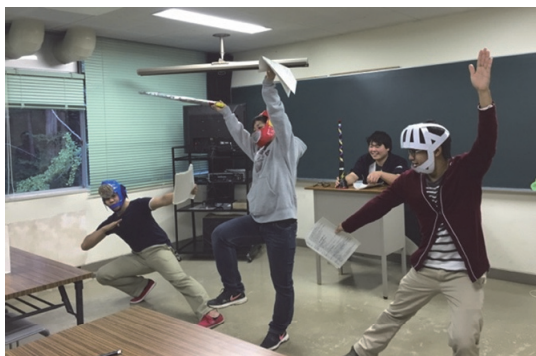


写真3 立ち稽古の様子

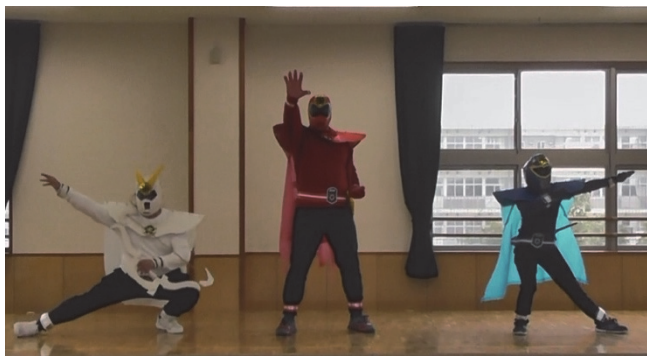


写真4 本番の様子（レンジャー登場のシーン）



写真5 本番の様子（巨大ロボット登場・悪役との戦闘シーン）



表2 劇「太陽戦隊おこめレンジャー」のテーマ（2004～2019）

	年度	テーマ
第1回	2004	お米をごはんにする方法をおしえよう！「おこめレンジャー登場」
第2回	2005	お菓子のたべすぎには気をつけて！「恐怖おかしデビル」
第3回	2006	健康な体になろう！「インフルとエンザに気をつけて！」
第4回	2007	好き嫌いをなくそう！「ヤサイヤ星人の襲来」
第5回	2008	病気に負けない子になろう！「インフルエンザの襲来」
第6回	2009	ニュータイプには気をつけて！「恐怖の新型インフルエンザ」
第7回	2010	食べ残しをしない子になろう！「ザンパンの襲来」
第8回	2011	歯をしっかりと磨こう！「虫歯帝国からの侵略者」
第9回	2012	野菜が好きな子。元気な子！
第10回	2013	ジャンクフードには気をつけて！「ジャンカーメンをやっつけろ！」
第11回	2014	夜ふかしは病気のほじまり！
第12回	2015	好き嫌いをせずに何でもたべよう！
第13回	2016	栄養バランスにきをつけよう！
第14回	2017	歯を大切にしよう！
第15回	2018	インフルエンザなんかに負けないぞ！「恐怖のインフルエンザ魔王」
第16回	2019	歯磨きする子は元気な子！「虫歯帝国オールブラックスを倒せ！」

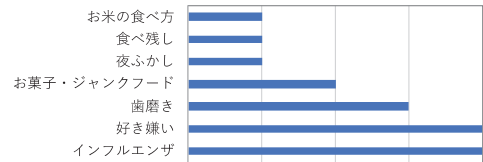


図1 劇「太陽戦隊おこめレンジャー」で取り扱われた内容

表3 劇「太陽戦隊おこめレンジャー」での配役（2004～2019）

(人)

	年度	レンジャー (主役)	助っ人	巨大 ロボ	悪役	その他	博士	園の 教員の 補助	総勢	助っ人のキャラクター
第1回	2004	3	0	0	0	3	1	0	7	
第2回	2005	3	1	0	1	1	1	0	7	太陽エネルギーの化身
第3回	2006	3	1	0	2	2	1	0	9	銀シャリン先生
第4回	2007	3	1	1	2	1	1	0	9	カレーの神様
第5回	2008	3	0	1	4	0	1	1	10	水の妖精
第6回	2009	3	1	1	1	1	1	0	8	赤い梅星のシュア
第7回	2010	3	1	1	1	0	1	1	8	ハンカチ王子
第8回	2011	3	1	1	1	2	1	0	9	クリニカ王子
第9回	2012	3	1	1	1	2	1	0	9	スギちゃん
第10回	2013	3	1	1	2	0	1	1	9	おもてなしクリステル
第11回	2014	3	1	1	1	1	1	1	9	エルサ（雪の女王）
第12回	2015	3	1	1	1	2	1	0	8*	五郎丸選手
第13回	2016	4	1	1	2	1	1	0	10	ピコ太郎
第14回	2017	3	2	1	2	1	1	1	11	サンシャイン/仮面ライダー
第15回	2018	3	1	1	2	0	1	1	8*	チョコちゃん
第16回	2019	3	2	1	3	0	1	0	10	IT兄弟
総計		49	16	13	26	17	16	6	141	

* 1人2役を含む

る（図1）。上演時期（11月下旬～12月上旬）が風邪やインフルエンザの流行時期と重なるために、その予防の意味も込めて採用することが多いと考えられるが、子どもの食や健康とイネ（おこめ）のパワーを結びつけた、オリジナルの環境教育のストーリーが形成されてきたことがわかる。また、配役が不足する年においては、幼稚園の教員にも出演を依頼して共同で取り組むこともあり（過去6回）、現役教員の演技のうまさや園児へのアドリブを学生たちが学ぶ場面にも遭遇してきた。

16年間にわたる活動において、参加者のべ人数は、141名に上る（表3）。各回の平均参加者数は、8.8名であり、学部3年生から大学院、教員までを総動員した結果である。学部卒業生で2回（2年間）、大学院修了生で4回（4年間）と複数回取り組むことになるが、中には、他大学の大学院に進学後も応援出演を重ねた大学院生等も含まれている。また、人数が不足する場合に他学科の学生を動員したり、幼稚園の教員に出演を依頼したり（前述）したケースもある。

配役としては、それぞれパーソナルカラーをもつレンジャー3名（脱穀ブルー、糲摺りレッド、精米ホワイト）を主役に第1回が開始されたが、その後、悪役を登場させ、対決シーンを含む構成となった。さらに、レンジャーが悪役の攻撃で窮地に陥り、それを救う「助っ人」の登場（2005年～）、レンジャーが操る巨大ロボットの登場（2007年～）といった内容が次々に加わり、よりテレビ番組の戦隊ヒーローに近い設定となって現在に至っている。また、助っ人については、子どもの共感を得るために、その年に巷で流行しているキャラクターのパロディがサプライズとして登場する形（2010年～）となり、定着している。

主役のレンジャーは4年生が担当することになっており、それを中心に他のメンバーが様々な配役を演じ

ることとなる。悪役はいかにレンジャーを困らせ、園児たちを怖がらせられるか、助っ人はいかにインパクトをもって登場し、園児たちを魅了できるか。それぞれの任務を全うするためのプレッシャーを乗り越えるための努力が課せられ、準備に全力を傾ける日々となる。このような中で、研究室内の学生間における縦と横の関係が密になることは言うまでもない。また、その経験はその後の教員生活や人生に大きく影響を与えるものと予想される。そのことに関しては、次章で検証することにする。

4. 考察

4. 1 園の環境教育・食育についての意義

幼稚園におけるイネ栽培は、一見難しそうに見えるが、園庭の一部でイネの栽培バットを設置するスペースを確保すれば、毎日園庭で遊ぶ中で、子どもたちにイネの成長する様子に気づかせることも可能であるし、自然観察の一場面、食べもの学習の一場面などに組み入れることも可能となる。環境教育を無理なく実践できる方法として有効であると考えられる。

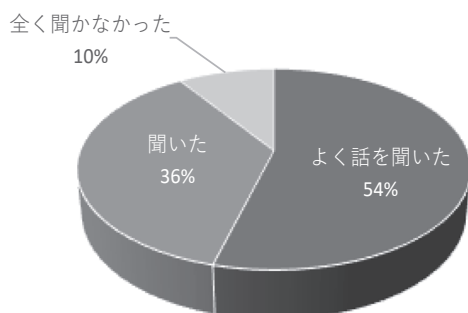
イネ栽培の活動のゴールは「もちつき大会」であるが、その直前で行われるイネに関する出前授業（劇「お米レンジャー」と米の加工作業の実演）も園に欠かせない恒例行事となっている（前述）。園で収穫されたもち米の脱穀から精米までの一連の作業の実演はレンジャーたちが直接園児に語りかけ、指導する形で行われている。園児たちは「脱穀」によって稲穂から粃がはずれ、「粃摺り」によって粃から玄米が現れ、「精米」によって真っ白いもち米になるプロセスを順を追って体験するが、それは直前の劇の鑑賞と相まって、さらに印象深い学びになると想像される（写真6）。

図2に園児の保護者を対象としたアンケート調査の結果を示した（2008年度に書面で調査）。「おこめレンジャーの後に家庭で話題が出たか？」については、9割の家庭において園児から話題が出されたことが確認され、その内容は不明であるが、印象が強く残っていることが明らかとなった。また、保護者のほぼ9割が園の食育活動に非常に関心があると捉えており、その関心に常に応える活動でありたいと認識しているところである。



写真6 イネからコメになるまでの工程（脱穀～粃摺り～精米）の実演と園児による体験

質問：「家庭でおこめレンジャーの話題は出ましたか？」



質問：「園の食育活動についてどう思いますか？」

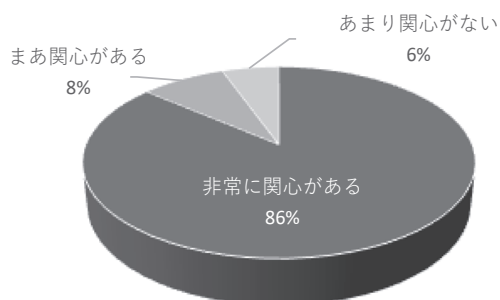


図2 園児の保護者に対するアンケート調査の結果（調査：2008年）

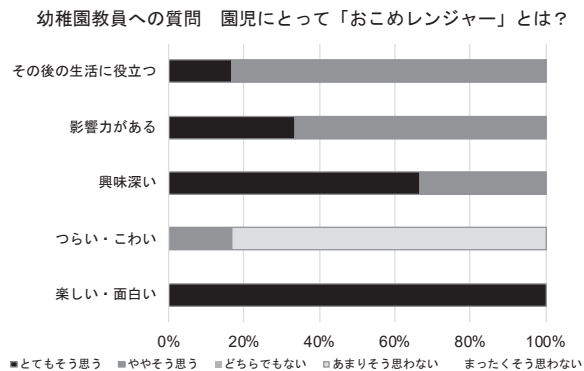


図3 幼稚園教員へのアンケート調査の結果 ①
(n=6)

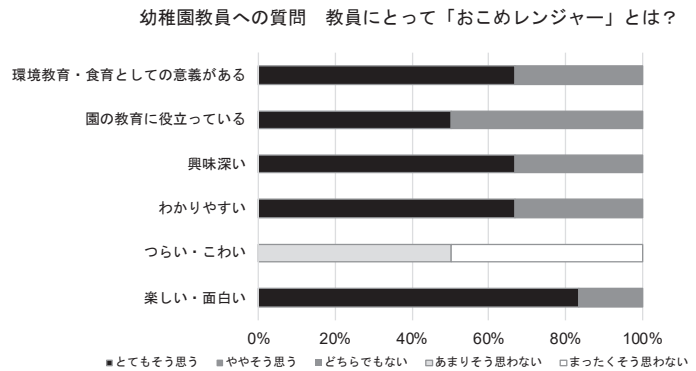


図4 幼稚園教員へのアンケート調査の結果 ②
(n=6)

また、園の教員（旧教員を含む）へのアンケート調査（2020年にGoogle formを用いてWeb上で実施、回答者6名）を行い、その結果を図3、図4に示した。

「園児にとってのおこめレンジャーとは？」の質問に対しては、「楽しい・面白い」や「興味深い」に高い共感が得られた。「影響力がある」や「その後の生活に役立つ」に関しても反対の意見は見られず、園の教員から見てもレンジャーの劇は園児にとって肯定的な印象をもつものであるということが明らかとなった。一方、「つらい・こわい」に関しては、否定的な回答が多くを占めており、園児にとって恐怖感を与えるものではないと教員も認識しており、その内容が適当であることが確認できた。一方、教員自身への質問においては、「楽しい・面白い」「わかりやすい」「興味深い」について、ほぼすべて肯定的に捉えられていること、さらに、「園の教育に役立っている」「環境教育・食育としての意義がある」についても否定的な回答は全く見られなかった。

自由記述による回答では、「おこめレンジャーが終わったあとも、劇中のセリフを子どもたちがよく真似をしていた。」や「子ども達にとって食べることは生きることだけでなく楽しみや、知的好奇心を育んだり、社会性を身に付ける場になったりなど、様々な学びになっていると思う。」といったように、園児にとって影響が残り、学びが広がっていくことを感じていることが明らかとなった。一方で、「声の大きさが聞き取りにくい時がある。」といった要望もあり、興奮した園児の声援が勝ってしまう状況の改善が今後の課題であることも認識できた。

これらのことから、環境教育・食育としての長年にわたる本活動は、多くの信頼と理解を得ながら、園児、教員の両者に肯定的に受け止められていると判断された。

4.2 研究室の学生にとっての意義

劇「おこめレンジャー」の上演時間に関しては、当初は10分程度であったが、少しずつストーリーが複雑になり、現在では、20分強の時間となっている。すなわち、テレビの戦隊ヒーロー番組とほぼ同じスケールである。出演メンバーに音楽が得意な学生（オーケストラ部や吹奏楽部）がいれば、楽器を演奏し歌を歌って締めくくることがある。また、演劇部の学生がいれば、緻密な台本をもとに、本格的な演技指導がなされた仕上がりとなる。とはいえ、毎年一定の水準を超えるクオリティに仕上がってくるのは、長い伝統の為せる業であると感じている。

16年にわたる活動の間に、定番シーンといえるものも生まれた。登場人物が食べ物を口にする前に必ずお決まりの掛け声とジェスチャーで行う「手洗い・うがい」や、必殺技の「太陽エネルギービーム」は必ずシナリオに盛り込まれる。また、レンジャーが相手を打つ際に発する「もちろんです！」は、園児たちの中で流行し、口癖となったほどである。そのような「定番シーン」は、先輩から後輩へと受け継がれ、知らず識らずに共通言語となって、研究室の伝統を支えてくれている。

そのような「おこめレンジャー」を経験した研究室の卒業生に対して、アンケート調査を行った（2020年にGoogle formを用いてWeb上で実施）。調査期間は約10日間にもかかわらず、回答率は82%であった。

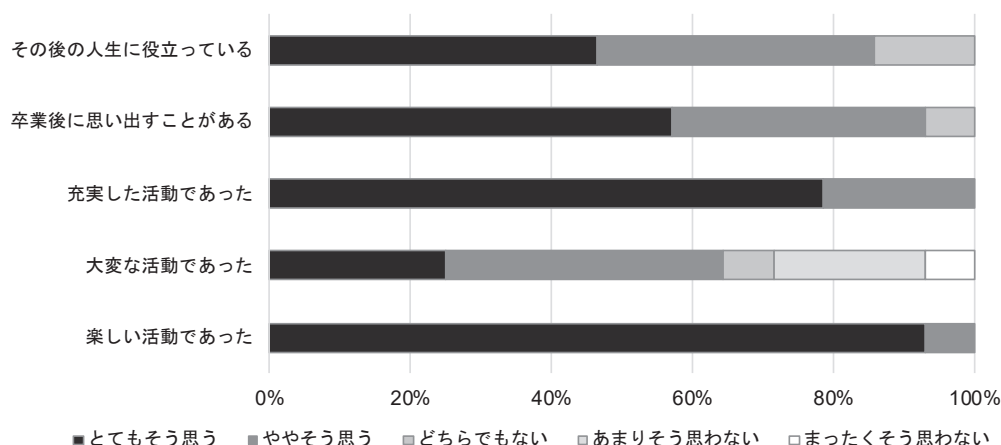


図5 研究室卒業生の劇「太陽戦隊おこめレンジャー」に関するアンケート調査の結果

(n=28)

得られた28名の回答結果を図5に示した。28名の内訳は、小学校教員6名、中学校教員11名、特別支援学校教員2名、高等学校教員1名、大学教員2名、企業2名、その他4名（NPO、主婦）であり、幅広い立場からの回答を得ることができた。また、卒業・修了年度も2004年から2019年と、ほぼすべての年代を網羅することができた。最も初期の回答者（中学校教員）は卒業から17年が経過しており、すでに学校現場ではベテラン教員となっている。

おこめレンジャーの活動について5件法（「とても思う」～「全く思わない」までの5段階）で質問した6つの項目の回答結果を図5に示した。まず、「楽しい活動であった」「充実した活動であった」に関しては、すべて肯定的な回答（とてもそう思う、ややそう思う）で占められており、本活動が満足度の高いものであったことがうかがえた。それに対して、「大変な活動であった」という問いに対する回答に関しては幅が広く、「とてもそう思う」と「ややそう思う」の合計が約60%であるのに対し、「あまりそう思わない」「まったくそう思わない」も合計で約30%みられた。これについては、演技やものづくりによる準備など、個人個人における得意・不得意に基づく回答結果であったと考えられた。しかしながら、「大変だった」と回答した者も、結果としては「楽しかった」「充実していた」と、肯定的な回答をしていたことから、彼らが、大変だった状況を乗り越えて、最終的には楽しさや充実感を味わうことができたものと推察された。

「卒業後に思い出すことがある」に関しても、肯定的な回答が90%を超えており、上記のような活動の記憶が、卒業後も思い出として強く残っていることが明らかとなった。また、「その後の人生に役立っている」に関しても肯定的な回答が80%を超えており、本活動によって得た経験が人生において活かされていると感じている卒業生が多いことが明らかとなった。

自由記述の回答においては、さらに具体的なことが明らかとなった。回答内容を文中のキーワード、内容を基にして、カテゴリー別に大きく分けてカウントしまとめたものを図6に示した。まず、『活動全体に対する感想』については、「結束力・団結力が高まった」や「達成感を感じた」という回答が最も多かった。次いで、「伝える力の大切さを知った」や「園児が喜んでくれた」であった。やはり、研究室全員で取り組んだことにより、メンバー間の絆が強くなったこと、それが達成感につながったと多くが感じていたことがわかった。一方、少数ではあるが、「準備が大変だった」や「時間を作るのが大変だった」という意見もみられ、苦労した記憶も強く残っているものと推察された。また、『活動から学んだこと』については、「人に伝える力」という回答が最も多かった。次いで、「子どもを楽しませる力」「協調することの大切さ」という回答も多くみられた。演技を通し、いかに子どもたちに楽しんでもらえるか、そのためにどうやったら伝えるのかを各メンバーが真剣に考え、取り組んだことがよく分かる結果であると考えられた。また、そのために仲間と協調して作りあげることの重要性が認識されていたことも伺える。

活動のメリット・デメリットに関しては、メリットとして、「研究室の結束力」が最も多く、「メンバーの特徴を知れる」「人のために活動する喜び」「他の教育機関との連携」などが挙げられた。研究室の結束力に

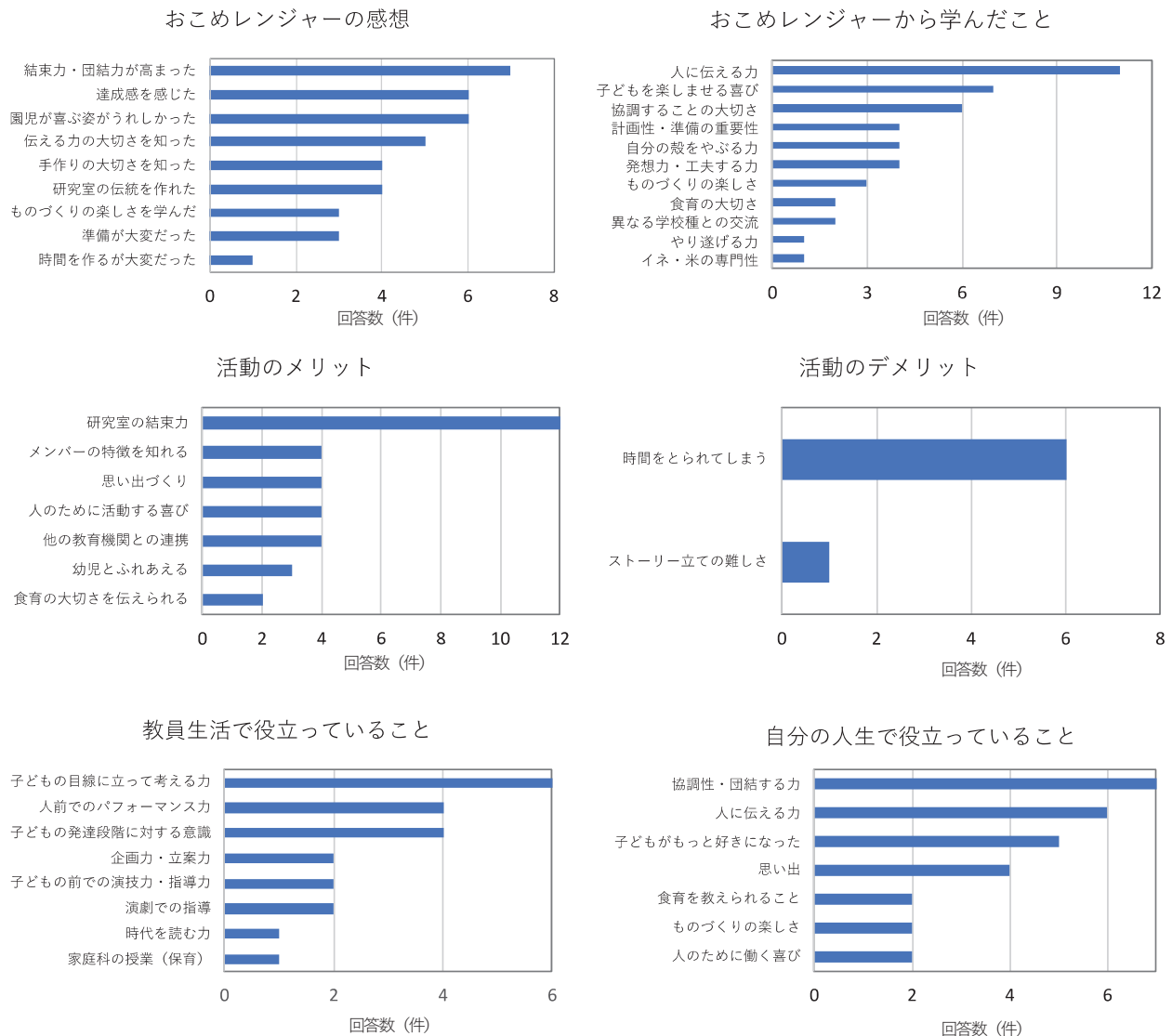


図6 研究室卒業生の劇「太陽戦隊おこめレンジャー」に関するアンケート調査の結果（自由記述）
(n=28)

関しては上記の質問においても多く挙げられているが、メンバーの特徴を知れることが結束力を強めるためにも有効であると感じていたとも考えられ、とても興味深い回答結果であった。一方、デメリットに関しては回答数が少なく、「デメリットはありませんでした」という回答も多かったが、その中で、「時間をとられてしまう」という回答は多く、メンバーが時間に苦労しながら他の活動（研究、部活、アルバイト）との両立を図ろうとしていたことが伺えた。

教員となった卒業生を対象とした質問『教員生活で役立っていること』については、「子どもの目線に立って考える力」「人前でのパフォーマンス力」「子どもの発達段階に関する意識」について多くの回答がみられた。幼児を想定した分かりやすい演技、そのための準備における工夫を重ねながら、本番でより良いパフォーマンスをしようとした各自の努力が、教員生活でも役立っているということを意味し、注目された。また、異なる学校種（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、大学）をめざし、現在それらの職に就いている卒業生がそれぞれに感じているという結果は、幼児教育に携わったことが、客観的に自分の教育対象（児童、生徒、学生）を深く理解するきっかけにもなるということを意味しており、大変興味深い結果であった。

全員への質問『自分の人生で役立っていること』については、「人に伝える力」「協調性・団結する力」という回答が多くみられた。これは、本活動を通して、仕事など、周囲とのコミュニケーションを図る上で大切なものを手に入れることができたという実感をもっていることの表れであると考えられた。また、「子どもがもっと好きになった」という回答も多かったことから、教育学部に進学した学生が幼児とのふれあいを通し、その原点を見直すことにもつながったことも想像できる。

5. おわりに

幼稚園における環境教育の題材としてイネの栽培を提案し、ゼミ活動による食育出前授業が園の教育活動の一部として定着し16年が経過した。本論文では、活動をふり振り返りながら、幼稚園側における認識・評価、ならびに研究室側における卒業生による認識・評価を試み、双方において本活動がどのようなものをもたらして来たかを明らかにした。その結果、幼稚園においては、園児、保護者においても印象に残るものとなっており、環境教育・食育に関する活動として、幼稚園教員からの評価も高いことが明らかとなった。

また、研究室の卒業生を対象とした追跡調査においても、ほとんどすべての卒業生にとって記憶に残る楽しく充実した活動であるとともに、協調性やコミュニケーション能力など、苦勞を通して培ったものが現在でも役立っていることが確認され、教員養成におけるゼミ活動としての成果であると判断された。そのような意味からも、本活動が幼稚園と大学の研究室双方にとって Win-Win の関係を築けているものと評価できるだろう。

本活動は一過性のイベント活動ではない。仲間と協力しながら真剣に愚直に一つのものを作り上げること、それを伝統として受け継ぎながら継続していくこと、それらが大切であることは、著者をはじめ、活動に携わったすべての人間が深く理解しているところであろう。また、その際に醸成されるエネルギーが研究室の本分である研究活動（農業技術に関する研究）を推し進める原動力となっていることはいうまでもない。

謝辞

本論文の執筆を行うにあたり、アンケート調査にご協力いただいた私立香椎照葉幼稚園の教員・旧教員ならびに、当研究室（福岡教育大学技術教育ユニット栽培学研究室）の卒業生諸氏に深く謝意を表します。

また、本活動は JSPS 科研費 16H03061, 20H01746 の支援によるものです。

参考文献

1. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成 30 年 3 月） 2018 フレーベル館
2. 国立教育政策研究所教育課程研究センター 環境教育指導資料（幼稚園・小学校編） 2014 東洋館出版社
3. 平尾健二・錦織充宏・山川隆憲・大山晋介・土肥ますみ・藤本登 2008 「栽培」活動を基にしたエネルギー環境教育の実践 教育系・文系の九州地区国立大学間研究論文, 第 1 巻, pp1-9
4. 平尾健二・洪田眞理・大久保麗子・江頭勝子・藤本登・中村重太 2005 幼稚園におけるイネ作り～エネルギー環境教育の視点から～ 福岡県環境教育学会第 8 回年会発表要旨集, p10
5. 松尾英輔 社会園芸学のすすめ～環境・教育・福祉・まちづくり～ 2005 農山漁村文化協会
6. 平尾健二・澁江公太・田中雄基・藤本祥・萩原早紀・山下恭平・濱岡範光 2010 教員養成系大学による幼稚園での食育活動 日本食育学会第 4 回学術大会講演要旨集, p41